

## ボート<sup>1)</sup> 競技による水辺環境の復権

～親水メディアとしてのボートの中心価値～

添田直人（葛飾区ボート協会）

「言問橋を渡り、長命寺のほうへ土堤を歩いて行ったときである。遙か向うの突き当たりに、見馴れないスタンドと旗塔を持った背の高い建物が優雅な姿を見せている。…眼を隅田川のほうへ移すと、折しも、商大艇庫の前を出たボートが矢のように滑りだし、言問橋のほうに下ってくる。八人の漕手の身体が一斉に起き上がり、また伏せるのも、こちらから見ると、左舷の四つのオールがまるで生物のように同時に行ったり来たりするのも珍しかったし、見事にも見えた。

…兩岸の群集は一瞬、水面を白い光のように横ぎる滑<sup>スライディング</sup>席艇に眼を奪われた。」

（田中英光、『端艇漕手』、1944年）

### 1 問題状況と研究の端緒

地域に川が存在する場合、その流域圏にある独自の文化が存在すると考えることができる。然るに、その独自の文化は単に川を交通路としてとらえ物資や情報的手段としてみるだけでは不十分である。また、河川の産業（交通、漁業等）や川の自然環境（水、土、空気、あるいは鳥、昆虫、魚等の多様な生物等）を個別に取り出して検討するだけでは、独自の文化を把握することは困難であろう。

川のある地域は、川に関わる人々が水辺の自然や風景を感性的にとらえることによって生じ、育まれ、形成されたはずである。幸田露伴、永井荷風、芥川龍之介、藤牧義夫、山田洋次らはいずれも川を愛する作品（小説、映画、版画等）を発表したが、それが作品として人々に受容されたのは、川の魅力についてある共感が生じたからであると思われる。

川のある地域において生活の中に川が存在し、それを文化として形成し、人々の共感を得るような川の魅力とは何か。

以上の問題に答えるためには、川のある地域、流域を一つの文化として総合的に把握することが必要である。本研究ではそのための一つの端緒として、近代スポーツの黎明期に存在した墨田公園周辺の隅田川東岸（本所、向島）のボート選手、艇庫と地域との関わりについて検討する。

ボートは、水辺の自然が豊かに確保され（水質、穏やかな波、空気等）、艇庫が地域に受容されることが必要である。ボートは、川の兩岸何れかではなく、川それ自体において、水面から兩岸の風景を見ることができる。また、ボートは、川の流域に沿って長距離の遠漕（向島～小名木川～江戸川～利根運河～利根川）ができ<sup>2)</sup>、交流ができる。

<sup>1)</sup> 本研究の対象とする「ボート」とは、モーター付きのプレジャーボートやカヌー等のことではなく、いわゆる漕艇のことである。私は漕艇をスポーツかつ川の芸術と考える。

<sup>2)</sup> 古城庸夫の研究によればこの流域で遠漕が行われた回数は140回以上にのぼる（「ボー

通常ボートそれ自体を取り上げる場合、競漕（レガッタ）、タイムレースに特化するスポーツのそれとして位置づけられよう。然るに、ボートはその特性上川のある地域と不可欠だから、艇庫、選手は地域と共鳴し、独自の地域文化が形成される可能性がある。

かつて、隅田川東岸（本所、向島）には最盛期に約 10 個以上の大学、高等学校等の艇庫（東京商大、東大、一高の各艇庫が本所。大倉高商、千葉医大、外語、日大、明治、開成中、慶応、早稲田、静水会の各艇庫が向島。）が林立し、「向島艇庫村」とよばれた。

高等教育機関に在学する者が少なかった時代に、日常的に一箇所に学生が集中して合宿し、生活するような地域はここ以外にはなく、歴史上稀有な例であった。

ところがこれまで、ボートの存在価値を媒介として、一地域を横断的歴史的に記述し、研究したものはほぼ皆無であり<sup>3)</sup>、地域文化として本所の艇庫、「向島艇庫村」に関する専門的な研究もほぼ皆無である。

本研究はこの空隙を埋めることによって川の魅力のありかを探るものである。

## 2 研究方法

- (1) 地域住民の取材
- (2) 文献調査

## 3 現時点の成果と考察

- (1) 地域の取材

① 第二次世界大戦の空襲により東京地区は戦災にあったが、本所地区の東京商大、東大の艇庫や向島地区は比較的戦災が少なかった。しかし、すでに隅田川東岸は明治時代中期以降工場地帯として形成され、水質汚濁がすすみ、地下水利用のため地盤沈下がすすんだ<sup>4)</sup>。また、首都高速道路が隅田川の墨堤上に建設された（1971年）。以上の客観的要因によって、全国大会は 1947 年以降、主要な競漕について、早慶戦は 1959 年以降（但し 1978 年以降隅田川で復活）、東大一橋大の「東商戦」は 1961 年以降、それぞれ埼玉県戸田に移った。

② 現在、隅田川にある艇庫は、1968 年の一橋大学艇庫解体を最後にまったく存在しない。艇庫がなければ競漕も困難であり、現在隅田川で行なわれる競漕も、年に 2 回であり（4 月の早慶戦、8 月のウォーターフェア隅田川レガッタ）、隅田川で日常的にボートを漕ぐ機会はなく、ボートを見ることはほとんどない。

かつてのボート盛衰期の隅田川のことを知る地域住民も少なくなっている。

③ 墨田区における地域住民によって「すみだ史談会」が存在する（結成は 1989 年 5 月）。その主要なメンバーから取材した結果は、概略以下のとおりである。

ア 墨田公園の最北部にあった商大艇庫は子供心にも美しいの一言であった。川でスタートダッシュの水しぶきは迫力があり、道端で会う選手はシャツと短パンが多かったが、かっこよかった。

---

ト競技の歴史展」、2008 年 4 月 20 日）。

<sup>3)</sup> 各大学等を横断しボートの通史を詳細に記録した唯一の文献は宮田勝善の『ボート百年』、1976 年改訂新版、時事通信社である。

<sup>4)</sup> 鈴木理生、『江戸の川・東京の川』、日本放送協会 1978 年（1989 年井上書院が再刊。）

イ 本所と向島は地域差があり、商大は向島の松の湯という銭湯に行き、東大は本所の有馬湯という銭湯に行っていた。銭湯で選手に会った時、大きくなったらボートを漕がないかと言われたことがあり、恥ずかしさと嬉しさとで心臓が高鳴った。自分も大きくなりたいと思い、選手を観察すると誰もが足の膝の裏が油で黒く汚れていた。

ウ 学生が自宅の店舗（洋品店）を訪ねてきて、ユニフォームの襟元に赤のリボンを縫い付けて欲しいと頼まれたことがあって、母親はミシンで一糸懸命縫い付けの作業をしていた。

エ 艇庫の近くの通りの向島商栄会（現、鳩の街通り）に、「ボート」というカフェがあり、商大の学生がよく出入りしていた。

## (2) 文献調査

① 隅田川についてボートに関わってきた各大学、実業団等によって『記念誌』等が多く存在する。しかし、それらは性格上各団体の個別の歴史を記述するものである。本研究では、その記述の中から地域とボート選手の地域とのかかわりを摘出する。

ア 東京商大・一橋大学 『一橋ボート百年の歩み』（1983年）

イ 早稲田大学、同高等学院 『漕艇部の百年、早稲田ボート文化史』（2002年）

ウ 慶応大学 『百年の歩み』（2004年）

エ 大倉高専・東京経済大学 『東京経済大学端艇部 100年史』（2004年）

オ 日本郵船 『転形期の人々』（1966年）

② 復興局・特別都市計画委員会等の議事録（1924年）

1923年関東大震災後の復興再建時、内閣直属の帝都復興審議会（のち特別都市計画委員会）を復興の決定機関とし、帝都復興院（のち復興局）を執行機関とする復興計画の策定がなされた。そこでは、東京の理想的都市はどうあるべきかが真剣に議論され、今日における東京の都市の原型が形成された。

この復興計画上、特に公園施設はできる限り新・増設が行われ、焼失区域に墨田、錦糸、濱町の三大公園が新設され、児童公園、東京市内各小学校校舎に隣接する小公園が約 51 個建設された。墨田公園は、隅田川を含むことに特徴があって、東西兩岸、北は白髭橋の下流から南は吾妻橋下流までの総面積が 18 万 4800 平方メートルである（比較して日比谷公園のそれは 15 万 5100 平方メートル）。これに隅田川の水上当部分（29 万 7000 平方メートル）を加えれば相当大規模である。

特別都市計画委員会の議論の焦点のひとつは、墨田公園の位置の選定であった。議論は、向島の料亭「八百松」（震災後営業を停止）跡地を何ゆえ墨田公園の敷地に入れないかという点であり、紛糾した（1924年3月14日第3回特別都市計画委員会議事録）。

紛糾した内容とは、料亭「八百松」跡地は、風景上から言っても、また、春秋のボートレースの際に「邪魔になり、今迄学生諸君は困り抜いて居った所」<sup>5)</sup> であるから、その跡地を公園敷地外の私有地として残さず公園敷地にすべきである、というのであり、それが大真面目に主張された。また、隅田川を生かした水辺の公園な

<sup>5)</sup> 復興調査協会、帝都復興史第3巻、pp1875-1915、興文堂書院、1930年

のだから、川の沿岸に歩行者の逍遙道路を建設すべきことが提案された。

その結果、

ア 料亭「八百松」跡地を墨田公園敷地内に編入すべき修正案

イ 川縁にある向島側の道路を公園の外に出して公園を完全に作る修正案

ウ 公園内にはその機能を害する建築物の建設を許可せざるよう注意せられんことを望むとの希望条件

がそれぞれ可決された（1924年3月17日、同月19日の公園市場特別委員会）。

### (3) 考察

上記の取材、文献調査等を検討して現時点で分かることは、次のとおり。

第1に、関東大震災後の復興計画において、水辺の公園である点を考慮して、都市公園の、なかんずく水辺と水面に着目して、ボートの利用価値を重要視し、この認識に反する公園計画に反対する姿勢が顕著という点である。

第2に、本所の艇庫と向島艇庫村は、隅田公園敷地に含まれている。上記(2)の「イ」と「ウ」の決議に該当する具体的な都市計画上の指導等が存在する。

すなわち同時期、東京商大の艇庫再建があり、同艇庫が隅田公園内に存在することから、当初計画が木造艇庫であったところ、復興局は、文部省、大学を通じて隅田公園の美観にふさわしくするために、艇庫を鉄筋にするよう勧告を行っている<sup>6)</sup>。

また、隅田川沿いに遊歩道が設けられ、墨田公園の真真中に架橋された言問橋や料亭「八百松」跡地付近から架橋された東武鉄橋についても、墨田公園からの眺望、景観を生かす構造物として工夫が加えられている。

ところで、公園設置によって隅田川沿岸は強固な土堤が築かれたが、その結果として以前から存在した川の荒天による風浪を避けていた船着場がなくなった。そのため「竹屋の渡し」周辺に舟溜を設置し、それにそって防波築堤を公園の築堤とすることによって、避難した舟の風浪の害を少なくした。このことは、戦後、治水上築かれた防潮堤（堤防を挟んで沿岸と川とを分断し、川の風浪を消えにくくする。）と比較して、雲泥の差があるといいうる。

第3に、本所の艇庫と向島艇庫村のボート選手らは、日常、艇を出して隅田川を行ったり来たり練習し、時には遠漕し、数万の観衆を集めての競漕はもちろん、早朝から地域の道路をランニングし、賄いや風呂は地域の食堂、銭湯を利用した。全国大会など選手が多いときやコーチは艇庫近くの一般家庭にも宿泊したようであり、地域の人々と日常的なふれ合いがあった。地域の住民は選手を受け入れ、子どもは選手を尊敬し、選手は練習の合間に子どもの勉強を教え、時には近くの飲食街に繰り出した。地域の住民は、競漕を応援し、勝負の喜怒哀楽を選手とともに味わったことがうかがえた。

## 4 参考文献

文中で触れたもののほかには、主として次のものがある。

① 藤牧義夫、隅田川絵巻（全4巻）、別冊太陽No.54、平凡社、1986年

② すみだ史談会、すみだ史談（No.1～No.35、同会報集大成）、1990年～2008年

<sup>6)</sup> 四神会、一橋ボート百年の歩み、1983年、pp310～327